

『人工知能時代における大学教育』に関するレポート

作成者：Ritter Diaz、ビジネスコンサルタント

東京、2023年8月28日

ちょうど2年前、COVID-19 パンデミックがもたらしたデジタル化の加速による大学教育の変容について、私は自身のブログに論説を掲載しました。その中で私は、パンデミックによる隔離処置や移動制限への対策として登場したデジタル・プラットフォーム上でのオンライン教育について言及しました。

それから2年後の今、私たちは ChatGPT の台頭を目の当たりにしています。ChatGPT は革新的な人工知能ツールであり、学習方法だけでなく、あらゆる場面での働き方にも革命をもたらそうとしています。さらには、ChatGPT が数多くの職業に与える変革や衰退といった影響についても大きな懸念があります。

大学は、学生達の将来のキャリアを見据えた準備期間としての重大な責任を担っており、チャットボットの出現で、教育学習プロセスの早急な見直しが必要とされています。同時に、新しいデジタル様式を効果的に扱うために必要なスキルを身につけられる、実践的な学習への切り替えが求められています。

これまでの教育制度は、多岐にわたる科目の情報の暗記と分析に主眼が置かれ、理論が重視されており、実社会での実践的な経験にふれる機会は限られてきました。

この点に関して、パナソニックの創業者である故 松下幸之助氏は、伝統的な大学教育が理論的・学問的な学習だけに過度に重点を置き、実社会の課題に取り組むために不可欠な実践的スキルや起業家マインドを育成していないと批判していました。彼は、この偏った学究的アプローチが、卒業生の創造性や問題解決能力を阻害していると考えたのです。

松下氏は、学歴のみを重視するのではなく、実践的な学習と、人生や仕事に役立つスキルの習得を促進する教育を提唱しました。また彼は、職場における実地体験や自発的な学習など、学習には様々な形態がありうると考えていました。

同時に彼は、物事の機能や問題に、効果的に取り組む方法を大局的に理解するためには、ビジネスの世界や産業界と直接関わるのが重要であると主張しました。また、社会的責任や社会福祉への貢献に重点を置き、教育において倫理的・道徳的価値観を浸透させることの重要性を強調していました。彼は、教育は有能な専門家を育てるだけでなく、社会の進歩に貢献する良心的な市民を育てるべきだと考えていたのです。

まとめると、松下氏は、大学はよりバランスの取れた教育を提供するために進化する必要がある、実践的なスキルの開発、創造性の育成、問題解決能力、倫理的価値観の浸透を、学習の中心に据えるべきだと主張していました。このアプローチは、大学生活がキャリアを成功させるためだけでなく、社会の中で、有意義で、貢献できる人生を送るための準備期間となることを目指したものでした。

しかしながら、今の時代においても、前述のしたような教育制度が一般的なため、ほとんどの学生は即戦力として必要な実践的スキルが不足しています。その結果、企業は、本来であれば教育機関で教えるべき基本的スキルの訓練に、時間と人的資源を投資せざるを得なくなっているのです。

現在、大卒者には実務経験がないとして、給与が低く設定されることも少なくありません。しかし、経験は不足していたとしても、大学在学中に特定のスキルを身につけられた場合、より良い報酬を交渉できることは確かです。

以上のことから、松下氏が指摘するように、大学の教育プログラムが社会のニーズに合致し、学位取得のためだけではなく、人々が生きていくための準備を促すことが不可欠だと言えます。私が大学2年生の時に受講した刑事訴訟法の授業を例にとってお話しすると、教授は理論的な原理原則を教えるだけでなく、その原理原則を具体的なケースに落とし込んで実践的に示してくれました。さらに、実例を使って法的な答弁書を作成するための基本的なやり方も教えてくれたのです。

この教授は、理論に精通しているだけでなく、刑事裁判の裁判官としての実務経験もありました。間違いなく、彼のクラスを受講していた学生たちは、法律事務所や法廷で活躍するための重要な能力を身につけることが出来たと感じています。

大学は、1) 知識の普及、2) 知識の発展、という2つの基本的な役割を果たしていることを、ここで指摘しておきます。前者は、社会が機能するために不可欠な一般常識などを人々に教え、広めていくことであり、後者は、多様な領域における科学的研究を推進し、社会の進化や自然環境から生じる問題を解決することを目的としています。

このような状況の中で、大学は、人工知能に関する実践的な知識を広めるために教育プログラムを再構築しなければならないでしょう。これには、デジタルリテラシーの習得、デジタルツールの活用、クリティカル・シンキング（批判的思考）の育成が含まれます。

デジタルリテラシーとは、特定のタスクを実行するために設計されたコンピュータ・プログラム（ソフトウェア）やアルゴリズムを理解し、適切に活用できるスキルのことです。デジタルリテラシーは自然言語や算数などと同じように、小学生のうちから教えるべきだと思います。初等か

ら大学までの教育を通じて、デジタルリテラシーを率先して身につけさせ、普及が進む自律型の機械や機器の特性を理解できるように、大学がリードしなければなりません。

さらに、ウェブページやブログのデザイン・管理、コミュニケーション・プラットフォームの駆使、テキスト・コンテンツ・画像・動画・音声・立体空間などを作成するアプリケーションの効果的な活用など、デジタルツールを活用するための技術的能力を育成する必要があります。このような能力を身につけることで、学生はさまざまな分野を効率的に学び、その後、専門的な領域で活躍することができるようになるのです。

おどろくべきは、多くの人が3つの基本的かつ基礎的な技術的スキル：Word、Excel、PowerPointを習熟しないまま、大学を卒業していることです。Word（テキスト）は使える人が多いですが、Excel（計算）やPowerPoint（プレゼンテーション）については、どちらか、あるいは両方とも使いこなせない人が多いと言えます。大学教育はこの点をよく見極め、学生に基本的な技術的スキルを身につけさせ、習得させることで、労働市場への即応性を高めるべきです。

大学全体で包括的に学ぶべき3つ目の必須要素は、クリティカル・シンキングです。このスキルの体得は、幼少期のうちに、身の回りのものに疑問を持つ事からスタートします。私は、祖母の家で叔父たちが政治、宗教、歴史、哲学、その他の学問について議論しているのを日常的に目の当たりにし、その様な環境に囲まれて育ちました。高校時代に、論理学と哲学を学んだことと相まって、私は理性的な思考を養うことができました。それらの経験を通じ、時に理性を失わせたり、偏った判断を招く、感情や情緒といった感覚の及ぼす影響を理解することができました。

クリティカル・シンキングは、人間の知能と人工知能を区別する核となるものです。クリティカル・シンキングとは、個人的・文化的な偏見にとらわれず、論理的な推論を通して自身の置かれた環境に疑問を持ち、自分の考えを客観的な証拠と照らし合わせて考察するといったような、すべての人に内在する能力です。

このスキルは、ソクラテス、プラトン、アリストテレスといった古代ギリシャの哲学者にまで遡る、人類の集合的経験の集大成と言えます。中世から近代への移行期には、フランシス・ベーコン（イギリス）、ルネ・デカルト（フランス）、ジョン・ロック（イギリス）、イマヌエル・カント（ドイツ）といった哲学者たちによって脚光を浴び、19世紀から今日に至るまで、西洋教育の中に織り込まれてきました。

しかし、逆説的にはなりますが、ソーシャルメディアの台頭によって、しばしば凡庸さと浅薄さが人間関係を支配するようになってきています。この傾向は、ChatGPTのようなAI主導のツールの出現によってさらに強まる可能性があります。情報が溢れているにもかかわらず、人々はクリティカル・シンキングに乏しく、ソーシャルメディアからのメッセージの良し悪しや信憑性を吟味することなく、そのままを受け入れてしまいがちな時代になってきています。

人工知能の時代に、凡庸さと浅薄さが蔓延していることを考えれば、大学は論理学と哲学の教育を深め、広げていくことに専念しなければならないと言えます。同時に、高校の教育課程においても、これらの学問に再び取り組むべきでしょう。

論理学と哲学は、特に人工知能が発達したこの時代において、人生の目的や理由を理解するのに必要な知的洞察力を私達に授けてくれるものです。さらに、全ての事象の最終的な結論を導き出せるものは科学とは限らないこと、また、現代の科学は、人間の思考の進化における一段階を示すものにすぎないと、これらの学問は教えてくれているのです。

訳：ディアス畑田 紋奈

備考：

この記事日本語に翻訳してくれたディアス畑田紋奈に感謝の意を表します。

私の記事は、これを読んでくれる家族、友人、そして皆さんに考えるための材料を提供し、熟考を促し、トピックに関して議論を行うことにあります。